

第1章 小菊栽培の背骨 これから栽培する人に

小菊栽培について、「儲かるのか、作業量が多くて出来ない」などと言われます。この章では、比較的初期投資が少ないと云われる小菊の露地栽培の概要について、特にまだ始めていない人に参考になるよう解説しています。

1. 圃場の確保

小菊栽培を始める時に圃場を選ぶ機会は少ないと思うが、もし選べるのであれば、ほとんどの農地は水田なので水利は図られていると思うが以下に注意すると良い。

(1) 必要な面積

小菊の定植可能本数は、10 アール当たり 11 千本（圃場の形状によって若干変動）で計算して必要な面積を確保する。

理想を言えば長方形で面積10～20アールだろうか。1人作業で30アールはキツイ。また、作業中に畝をまたいで移動する必要がある、フラワーネットがあつて遠回りになるので、畝長50m以下が適当と思われる。

- ・ウネ芯間隔 145 cm、ウネ頂部幅 60 cm
- ・ウネ頂部に幅 20 cm 3 目のフラワーネットを置き、両端 2 列（真ん中は植えない）に 10 cm 間隔で定植するので、ウネ長 1 m 当たりの定植本数は 20 本
- ・ウネ両端に 2m の通路幅を設けるので 1 ウネの定植本数は、
(圃場の長さ－4) × 20

(2) 留意事項

① 耕土が深く排水が良好なこと

梅雨明けや夏期に乾燥することがあり、畝間灌漑が必要になる。
大雨で畝間に水が滞留することもあり、排水が良くないと発育不良を起こす

② 圃場に日陰部が無いこと、強風スジでないこと

③ 自宅に近く人家から離れていること

離れていると菊に目が届きにくい。

④ 電照や排水ポンプ稼働など、電源があれば対処法が広がる。

⑤ 獣害は、鹿が菊を食べることは無いが、イノシシを含め踏み荒らされる恐れはある。

早朝の防除がしにくい。

ネット張りで対処する。

2. 栽培の開始：穂木の購入と契約の仕組み

小菊の栽培は、苗（穂木）の挿木から始まります。県内の小菊品種は1つの種苗会社から供給されており、その営業担当を通じて種苗法に沿った契約をした上で購入することになります。組合員などからは、種苗会社の許可が無い限り譲り受けできません。

契約は、①種苗会社と栽培者との穂木販売契約があり、次いで②品種ごとの栽培分類（許諾栽培契約と定植穂契約）による契約があります。

許諾栽培契約は許諾料を払うことで穂木を自家生産する権利が得

イノチオ精興園

大規模な本格栽培向き

られます。定植穂契約は単年で穂木を購入する契約で、栽培後は株を廃棄する必要があります。主な購入条件を表にしたので、カタログを取り寄せ、自分の経営目的に合った契約をえらびます。

なお、穂木の注文は品種当たり 1 千本単位が原則ですが、新規栽培では 500 本以下を希望することもできるようです。

営業担当に相談する。
翌年は 1 千本購入が求められる。

契約方法	穂木単価	許諾料（1 品種当たり）	ロイヤルティ
許諾栽培契約	15 円	11 万円（穂木 1 千本付き）	経営全体で 15 万本以上出荷で 1.65 円/本
定植穂契約	20 円	なし	なし

注：価格は税込みで R 6 年末段階のもの。詳しくはカタログ参照のこと。

3. 品種の選択

赤、白、黄色の 3 色をセットで咲期（盆咲、彼岸咲、10 月咲）別に栽培します。したがって、3 色を 3 咲期栽培すると、1,000 本×3 品種×3 咲期で 9 千本の作付になり、圃場 10 アールを確保する必要があります。

品種の特長は、種苗会社のカタログに記載されていますが、花卉色以外に花芯色、自然開花期、草丈、到花週数（電照）、咲型（頂点咲など）、ポリウム感などがあります。他に白サビ耐性、下枝発生の有無、分結数の多寡などがあります。令和 3 年に当組合員が、1,800 本以上植え付けられた品種は下表のとおりです。

品種の選択は、営業担当に相談する。カタログに記載のない特徴は組合員に聞くのが良い。

全体では 14 万本 71 品種

	盆咲	彼岸咲	10 月咲
赤色	精ひなの（7, 9,700）、秀美こと	精くちべに、精友わらい、精はちす	
白色	精かのか（3, 5,620）、精そよかぜ（6, 7,970）、白精ひなの	精くるり、精しろく	精しののめ、精しょうま
黄色	精はぎの（5, 9,000）	精きんたか、精さとみ、精やすらぎ（6, 7,640）	精玉かずら

注：（ ）内は、5 千本以上定植品種の合計の栽培者数と定植本数

4. 栽培時期を決める要因

この地域では、盆咲、彼岸咲、10 月咲が基本です。他に 6 月咲（9 月に定植）や晩秋～年末出荷（7 月に定植）も少し栽培されています。ただ、11 月～5 月の荷受会社市場では、小菊は沖縄産が圧倒的なシェアを占めており、気温の低いこの地域ではコストがかかるので栽培されていません。

資料－ 1 に 6 月～10 月の小菊価格相場（荷受会社、仲値）のグラフを掲載しました。

グラフからも分かるように、盆咲は、需要量も多く高価格が安定して見込まれるので出荷能力（労力）最大の定植本数にします。彼岸咲と10月咲は、作業が重複するので盆咲と同じ規模で作付けすると手が回らなくなります。彼岸咲と10月咲は、労力分散を考えて盆咲の6割程度にするのが良いと思われます。

また、3咲期栽培するのは、付表－1からも分かるように、小菊の価格がかなり変動するので、盆～10月まで連続して出荷することで価格変動リスクの分散を図るためです。

5. 栽培規模を決める要因

（1）出荷調製能力

出荷日に集荷場に持ち込める量（本数か箱数）をここでは出荷調製能力と呼んでいます。つまり、朝収穫して選別して束を作って保管し翌朝に箱詰めして集荷場に搬入できる能力です。

一方、盆咲では7月下旬から8月10日頃まで隔日（火、木、日）で8回程度の出荷日があります。この8回の出荷日に全部を出荷するには次のように計算します。

6千株植えた場合の出荷見込み：2,250本（8回の平均値）

9千本 ” ：3,375本（8回の平均値）

したがって、1人作業では9千本の定植が上限ではないかと想定されます。実際の作業実感からしてもこのくらいです。

（2）1品種の栽培規模

もう1つの要因は、品種ごとの収穫期間で、小菊は咲きだすと3～4出荷日で出荷が終わりますが、その第2出荷日辺りがピークになることです。定植1千本の場合のピークは約1,200本になります。出荷調製能力より低いのですが、他の品種も咲いているので慣れるまでは収穫しきれないことも良くあります。なお、彼岸咲と10月咲は収穫期間が短い（一気に咲く）傾向にあります。

よって、1品種当たりの定植本数は、1人作業の場合は1,500本程度が上限と考えられます。

1人作業の場合は、1咲期（例えば盆咲）9千本程度で1品種当たりの定植本数を1,500本程度で6品種とするのが適当と考えられます。どんな品種を植えるかは、何年かけて品種の特性を理解し、うまく開花調整して順番に咲かせることで労力の範囲で作業して出荷するのが理想です。

盆咲の出荷が彼岸咲と10月咲の整枝に重なる。

彼岸咲は、盆咲出荷が始まるまでに整枝が終わる規模が良い。

10月咲は、盆咲出荷後の整枝になるので、整枝が短期間で済むよう彼岸咲より少ない規模にする。労力次第なので、盆咲並みに増やすこともできる。

この能力は、連続してできるのは1人作業（選花機あり）で3,500本、2人作業では8～9千本くらいではないか。

この前後は価格が低いので、できるだけこの8回で出荷をしてしまいたい。

$6 \text{ 千株} \times 4 \text{ 本立} \times 0.75 \div 8 \text{ 日}$

$9 \text{ 千本} \times 4 \text{ 本立} \times 0.75 \div 8 \text{ 日}$

整枝4本仕立、0.75は出荷率多いと収穫できず咲いてしまうが、これを産直に回す手もある。

第1出荷日が1割で順次4割、3割、2割と云った具合

$1 \text{ 千株} \times 4 \text{ 本立} \times 0.75 \times 0.4$

盆咲は4出荷日、彼岸と10月咲は3出荷日での出荷が多い。

1品種の定植2千本は多い。

もちろん選花機ありの場合

6. 収益性の指標

小菊を栽培してどれくらいの収入になるのかは、経営計画を立てる上で非常に重要な指標です。基礎になる栽培上の数値は3つ。

①1人作業の定植本数は盆咲9千本、彼岸咲と10月咲で各5,600本で計20,200本

②出荷率2.5本、販売単価43円／本

③収益率（（売上額－経費）÷売上額）は50%

これから計算すると、売上額217万円、粗利益109万円といったことになります。

定植本数を大きく増やすことはできず、出荷率も3本は難しいところです。販売単価は生産者の努力外だし、収益率も最初は機械の調達に追われるので実際はもっと低いことになります。

出荷率と収益率の改善努力をしながら、ボトルネックとなっている作業の改善を図り、作付け本数の数倍増を目指すことが独立した経営への道だろうと考えられます。

彼岸咲と10月咲は盆咲の6割11千本／10aなので20aの圃場が必要
出荷率は、定植1株から出荷できた本数で、当組合の目標値は2
収益率は経験値

品種単位では3.5本の実績はあるが平均だと難しい。

整枝、収穫・調製、防除などでの革新的な方法への転換

7. 栽培に必要な資機材

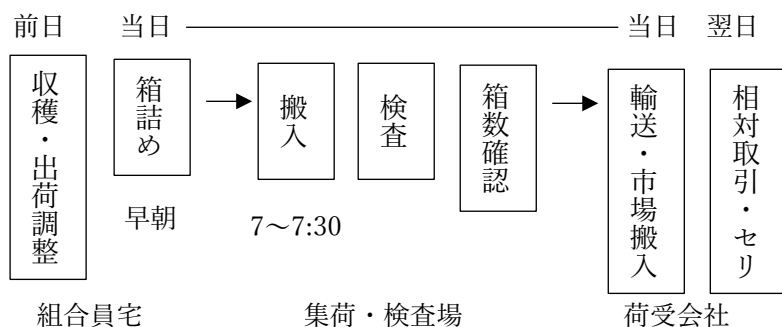
小菊の露地栽培は、水稻ほどの農機への初期投資を必要としませんが、作業の種類が多いので多種類の道具が必要です。買い揃えることも可能ですが、既存品の代用や改造、ヤフオクなどを利用して安価に入手することが経営安定につながります。

資料－2に必要資機材表を示す。

8. 出荷体制

出荷時期には毎週火、木、日曜日にJAの菊集積場に、箱詰めした小菊に伝票を添えて各自搬入します。なお、鮮度維持のため、箱詰めは当日朝行うのが組合の申合せ事項です。

新規参入者の場合、組合非加入でも1年に限り組合員扱いして荷受会社への出荷を認めています。



搬入場では、円滑な検査と輸送業者への引き渡しのため、出荷した組合員が出荷箱の運搬や検査補助を共同作業で行います。

JAが出荷体制を運営しています。出荷期間中（7～10月）の出荷

日には、担当指導員が伝票類の整理と荷受会社との連絡業務を行い、販売代金は、諸経費を控除のうえ 10 日分をまとめて 10 日後（例：7 月 11 日～20 日分を 7 月 30 日）に組合員口座に振り込まれます。共同選花は行っていないので、出荷経費は約 15%と比較的低い値になっています。

項目	単価	金額	
検査料	0.2 円／本	260	
市場手数料	販売額の 10%	7,389	
農協手数料	販売額の 2%	1,477	
出荷運賃	1.43 円／本	1,859	
出荷経費の計		10,985	14.9%

注：1,300 本、税込み 73,890 円の売上の例

JA は、販売事業の一環として小菊の荷受会社向け受託販売を行っているほか、購買事業として菊組合員への小菊生産資材の販売を行っている。さらに事務局として当組合の運営を担っている。

9. 栽培技術の習得と向上

小菊栽培で技術が収入に大きく影響することを示しました。

技術習得の基礎的な部分や金融・補助事業は、JA や市農政課、県技術指導機関などに委ねることにして、ある程度栽培を経験したら小菊栽培の利害関係者が良い情報源になります。

種苗会社や農薬会社、農業資材会社の営業担当や小菊の栽培・出荷者です。ネット上で栽培技術や資機材の情報を探すのも有効です。

小菊栽培に利害関係がある人でないと実用技術は持っていない。

イノチオ精興園、農薬登録情報提供システム、荷受会社サイト、中央卸売市場統計、ぐーたら父ちゃんの菊栽培、農薬通販、モノタロウ、日本農業システム、ヤフオクなど